

は肉情的愛情のみなりしなり。肉情よりして戀愛に入るより外には愛情を説くの道なかりしなり。プラトリーの愛情もダンテの愛情もバイロンの愛情も彼等には夢想だもすること能はざりしなり。彼等は忠孝を説けり、然れども彼等の忠孝は寧ろ忠孝の教理あるが故に忠孝あるを説きしのみ。今日の俳論家が勸語あるが故に忠孝を説かんとすると大差なきなり。彼等は人間の根本の生命よりして忠孝を説くこと能はざりしなり。彼等は節義を説けり、善惡を説けり。然れども彼等の節義も彼等の善惡も寧ろ人形を弁べたるものにして、人間の根本の生命の絃に觸れたる者にあらざるなり。謂ふ所の勸善懲惡なるものも、斯る者が善なり、斯るものが惡なりと定めて、之に對する勸懲を加へんとしたる者にして、未だ以て眞正の勸懲なりと云ふ可からず。眞正の勸懲は心の經驗の上に立たざるべからず、即ち内部の生命の上に立たざるべからず。故に内部の生命を認めざる勸懲主義は到底眞正の勸懲なりと云ふべからざるなり。彼等は世道人心を説けり、爲すあるが爲めに文を草すべきを説けり、世を益するが爲めに文を草すべきを説けり。然れども彼等の世道人心主義も到底偏狹なるポジティブイズムの誤謬を免かれざりしなり。未だ根本の生命を知らずして、世道人心を益するの正鵠を得るものあらず。要するに彼等の誤謬は人間の根本の生命を認めざりしに因するものなり。讀者よ吾人が五十年の人生に重きを置かずして、人間の根本の生命を尋ぬるを責むる勿れ、讀者よ吾人が眼に見ゆる所の事業に心を注がずして人間の根本の生命を暗索するものを責むる勿れ、讀者よ吾人の中に或は唯心的に傾き、或は萬有的に傾くものあるを責むる勿れ。吾人は人間の根本の生命に重きを置かんとするものなり。而して吾人が不肖を顧みずして、明治文學に微力を獻せんとするは此範圍の中にあることを記憶せられよ。

明治の思想は大革命を経ざるべからず、貴族的思想を打破して、平民的思想を創興せざるべからず。吾人が敬愛する先輩思想家にして既に大に此般の事業に鐵腕を振ひたるものあり。吾人が若少の身分を以て是より進まんとするもの、豈彼等の既に進みたる途に外れんや、吾人豈人情以外に出で、ベベルの高塔を築かんとする者ならんや。若し夫れ人間の根本の生命を尋ねて、或は平民的道德を教へ、或は社會的改良を圖る者をしも、ベベルの高塔を砂丘に築くものなりと言ふを得ば、吾人も亦たベベルの高塔を築かんとする人足の一人たるを甘んぜんのみ。

文藝は論議にあらざること幾度言ふとも同じ事なり。論議の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは論議の筆を握れるものゝ任なり。文藝（純文學と言ふも宜し）の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは文藝に従事するものゝ任なり。純文學は論議をせず、故に純文學なるもの無し、と言はば誰か其の極端なるを笑はざらんや。論議の範圍に於て善惡を説くは、正面に之を談ずるなり。文藝の範圍に於て善惡を説くは裡面より之を談ずるなり。

人性に上下なく、人情に古今なし、とは觀察論の著者の名言なり。實にや詩人哲學者の言ふところは、人情が自ら筆を執つて萬人の心に描きたるものに外ならざるなり。善と言ひ、惡と言ふも元より道徳學上の製作物にあらざること明らかなり。究竟するに善惡正邪の區別は人間の内部の生命を離れて立つこと能はず。内部の自覺と言ひ、内部の經驗と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の内部の生命を語るより外に出づること能はざるなり。内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり。詩人哲學者の爲すところ、豈神の業を奪ふものならんや。彼等は内部

の生命を観察する者にあらずして何ぞや。(國民之友觀察論參照)然れども彼等が内部の生命を観察するは沈靜不動なる内部の生命を観るにあらざるなり、内部の生命の百般の表顯を観るの外に彼等が観るべき事は之なきなり。即ち人性人情の various Manifestations を觀るの外には觀るべき事は之なきなり。觀は何處までも觀なり。然れども此の場合に於ては觀の中に知の意味あるなり。即ち觀の終は知に落つるなり。而して觀の始も亦た知に出るなり。人間の内部の生命を観ずるは、其の百般の表顯を観ずる所以にして、靈知靈覺と觀察との相離れざるは之を以てなり。靈知靈覺なきの觀察が眞正の觀察にあらざること之を以てなり。

夫れヒューマニチー(人性、人情)とは人間の特有性の義なり。詩人哲學者は無論ヒューマニチーの觀察者ならずんばあらず、然れども吾人は恐る、民友子の觀察論の讀者には、或は詩人哲學者を以て單に人性人情の觀察者なりと誤解する者あらんことを。民友子の觀察論を讀みたる人は必らず又た民友子の「インスピレーション」を讀まざるべからず。然らずんば吾人民友子に對する誤解の生ぜんことを危ぶむなり。詩人哲學者は到底人間の内部の生命を解釋するものたるに外ならざるなり。而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざること信ぜずんばあざるなり、人間のヒューマニチー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は即ち爰に存するものなるを信ぜずんばあざるなり。生命—此語の中にいかばかり深奥なる意味を含むよ。宗教の源泉は爰にあり。之なくして教あるはなし、之なくして道あるはなし、之なくして法あるはなし。眞理—世上所謂眞理なるものは何事をか意味する。ソクラテスも靈魂不朽を説かざれば一個の功利論家を出る能はざるな

り、孔子も道は遠きにありと説かざれば一個の贅贅者たるに過ぎざりしなり。道は遠きにありと言ひたるもの、即ち人間の秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を説きたるもの、即ち生命の源泉は人間の自造的にあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして天下豈人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信ずるものにあらずして眞正の人性人情を知るものあらんや。五十年の人生を以て人性人情を解釋すべき唯一の舞臺とする論者の誤謬は多言を須ひずして明白なるべし。

文藝上にて之を論ずれば、所謂寫實派なるものは客觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。客觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察する者なり。此目的の外に嘉贊すべき寫實派の目的はあらざるなり。世道人心を益するといふ一派の寫實論も此目的を外れたらば何等の功益もあらざるなり。勸善懲惡を目的とする寫實派も此目的を外れたらば何の勸懲もあらざるなり。爲すあるが爲と言ひ世を益するが爲と言ふも眞正に此の目的に適はするより外なきなり。所謂理想派なるものは、主觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。主觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察すべき者なり。いかに高大なる極致を唱ふるとも、いかに美妙なる理想を歌ふとも、この目的の外に理想の嘉贊すべき目的はあらざるなり。

理想とは何ぞや。理想派とは何ぞや。吾人は此小論文に於て、理想とは何ぞやを説かざるべし。然れども爰に一言せざるべからざること文藝上に言ふところのアイデアなる者は、形而上學に於て言ふところのアイデアとは、名を同うして物を異にする者なること之なり。形而上學にてアイデアリスト(唯心論者)といふものは、文藝上にてアイデアリスト(理想家)といふところの

者とは全く別物なり。

文藝上にて理想派と謂ふところのものは、人間の内部の生命を觀察するの途に於て、極致を事實の上に具體の形となすものなり。絶對的にアイデアなるものを研究するは形而上學の唯心派なれども、そのアイデアを事實の上に加ふるものは文藝上の理想派なり。ゆゑに文藝上にては殆どアイデアと稱すべきものはあらざるなり。其の之あるは理想家が暫らく人生と人生の事實的顯象を離れて、何物にか冥契する時に於てあるなり。然れども其は瞬間の冥契なり。若しこの瞬間にして連続したる瞬間ならしめば、詩人は既に詩人たらざるなり。必らず組織的學問を以て研究する哲學者になるなり。詩人豈斯の如き者ならんや。

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり。この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは言ふなり。而して吾人は、眞正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には之なきを信ぜんとする者なり。インスピレーションを知らざる理想家もあらん、宗教の何たるを確認せざる理想家もあらん、然れども吾人は各種の理想家の中に就きて斯の如きインスピレーションを受けたる者を以て最醇最粹のものと信ぜんとするなり。インスピレーションとは何ぞ。必らずしも宗教上の意味にて之を言ふにあらざるなり。一の宗教（組織として）あらざるもインスピレーションは之あるなり。一の哲學なきもインスピレーションは之あるなり。必覚するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに對する一種の感應に過ぎざるなり、吾人の之を感じるは電氣の感應を感じるが如きなり。斯の感應あらずして、曷んぞ純聖なる理想家あらんや。

この感應は人間の内部の生命を再造する者なり。この感應は人間の内部の經驗と内部の自覺とを再造する者なり。この感應によりて瞬時の間、人間の眼光はセンチユアル・ウォルドを離るゝなり。吾人が肉を離れ實を忘れ、と言ひたるものに外ならざるなり。然れども夜遊病患者の如く「我」を忘れて立出るものにはあらざるなり、何處までも生命の眼を以て、超自然のものを觀るなり。再造せられたる生命の眼を以て。

再造せられたる生命の眼を以て觀る時に、造化萬物何れか極致なきものあらんや。然れども其極致は絶對的のアイデアにあらざるなり。何物にか具體的の形を顯はしたるもの即ち其極致なり。萬有的眼光には萬有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。

熱意

眞摯の脚に熱意なる者あり。人性の中に若し「熱意」なる原素を取去らば、詩人といふ職業は今日の榮譽を荷ふこと能はざるべし。すべての情感の底に「熱意」あり、すべての事業の底に熱意あり、凡ての愛人の底に熱意あり。若しヒューマニティーの中に「熱意」なるもの無かりせば、恐らく人間は歴史なき他の四足動物の如くなりしなるべし。

勞働と休眠は物質的人間の大法なり、然れども熱意は眠るべき時に人を醒ますなり。快樂と安逸は人間の必然の希望なり、然れども熱意は快樂と安逸とを放棄して苦痛に進入せしむることの

り。生は人の欲する所、死は人の恐るゝ所、然るに熱意は人をして生を捨て、死を甘受する事ありしむ。人間の事恆に「己」を繞りて成れり。己を去つて人間の活動なし。然るを熱意は往々にして「己」を離れ、身を輕んじて、「他」の爲に犠牲とならしむる事あり。愛國家の心靈を鼓舞して、天下蒼生の爲に、赫々たる功業を奏せしむるものもこの熱意なり。忠臣君の爲に死し、孝子親の爲に苦しむも、この熱意あればなり。戀人の相想も、讐仇の怨惡も、その原素に於ては即ち一なり。人間を高うするもの、人間を卑うするものも、義人を起すものも、盜見を生ずるものも、その原素に於てはその熱意の外あることなし。

熱意とは何ぞや。感情の激甚に外ならざるなり。感情の中の感情たるに外ならざるなり。且つ湧き且つ静まり、且つ燃え且つ消ゆる感情の、一定の事物の上に接續して、連鎖の如き現象を呈する者即ち熱意なり。人間は道義的生命の中心として愛を有つと共に、感情的生命の中心として熱意を有つなり。熱意は凡ての事業に結局を與ふる者なり。痴情の熱意には、痴情の結局を見るの意味あり。節義の熱意には節義の結局を見るの意味あり。熱意は常に結局を睨んで立てり。熱意の終るところは結局にあり。

人間の五官は靈魂と自然との中間に立てる交渉器なり。靈魂をして自然を制せしむる是なり。而して人間の靈魂をして全く自然を離れて獨立せしめざる者も亦た是なり。靈魂の一侧は常に此の交渉器を通じて自然と相對峙す。而して靈魂の他の一侧は、他の方面より「想像」の眼を假りて、自然の向うを見るなり、自然を超て、自然以外の物を観るなり。人に想像あるは人に思求あるを示すものなり、人に思求あるは、人に熱意あるを示すものなり。熱意は冷淡と相反す。冷淡

は人を閉殺し、熱意は人を活動的ならしむ。冷淡は思求なき時の心靈の有様にして、人生の意味少なき場合を指すなり。幸福なる生涯には、熱意なる者少なし。熱意は不幸の友なり、熱意は悲哀の隣なり。幽邃遠谷の中に濃密なる雲霧を屯せしむ。平地には斯の如き事あらず。國亂れて忠臣興るなり。家破れて英兒現けるゝなり。遂げ難き相思益々戀を激發し、成し難きの事業愈々志氣を奮勵す。不幸の觀念は何物をか捉へんとして捉ふること能はざるより生ずるなり。此の觀念の存在する限は、心靈の平衡を失ひたる者にして、熱意なる者は蓋し此の平衡を回復せんが爲に存するなり。磁石に消極、積極の二質あり、この二質が平均せざる限は、引力といふ不可思議の力を此世より絶つこと能はざるなり。斯の如く人間も亦た心靈の平衡を回復せざる限りは、熱意といふ不可思議の力を絶つこと能はざるなり。熱意は力なり。必らず到着せんとするところを指せる、一種の引力なり。この引力は人をして適ま偉大なる人物とならしめ、適ま醜惡なる行爲をなさしめ、或は善、或は惡、或は聖愛、或は痴情、等の名を着たる百般の光景を現出して、人生を變幻極りなきドラマたらしむ。

人は夢の如き事實を追隨する事あり、事實の如き夢を追隨する事あり。虛心を以て觀る時は夢にして、而して熱意を以て觀る時は事實の如く視らるゝ者あり。熱意を以て觀る時は夢にして、虛心を以て觀る時は事實の如く視らるゝ者あり。虛心は想像を容れず。熱意は想像の好友なればなり。虛心は徹頭徹尾事實の中に注ぎ、熱意は往々にして、想像の跡を追うて事實の域を脱す。虛心は意味ある者を意味なくし、熱意は意味なき者に意味を加ふ。虛心は波瀾を迎へ、熱意は風濤を生ず。諒解力は常に道理と伴はず。道理は能く人を抑制し、諒解力は能く人を興發す。夢と

事實とは、其物の夢と事實とにあらず、之を夢とする者と之を事實とする者との別あるのみ。預言者の先見は夢の如くにして而して事實なる事あり、商賈人の蓄財は事實の如くにして而して夢なる事あり。熱意は凡ての事に洗禮を施す者なり。熱意なきは、活火なきなり。活火なきは意味なきなり。

意味多き生涯と、意味少なき生涯とは、プロビデンスの手に握れる斧の撃ち方の相異より生ずる差別なり。人間の額上に刻める鋸波は即ち、意味多きと意味少なきとを見分けべき字引の一種なり。

人生を解釋せんとする者は詩人なり。而して、詩人の尤も留意するところは意味の一字にあり。熱意に即ち意味なり。全く熱意なくして意味ある者あらず。意味を生ずる者は熱意なり。人生に意味あるは即ち熱意あるが故なり。熱意あるが故に執着あり、執着あるが故に、困難あり、又た不幸あり。悲哀なる出し物に對して、悲哀の同感を生ずるは彼方の熱意が此方の熱意を誘發すればなり。熱意はトラゼデーの要素にして、而して、悲哀の物に對する快感の要素の一なり。人生に熱意あるは即ち戯曲にトラゼデーある所以なり。熱意、之れ詩人が討究すべき一題目ならずや。

桂川(弔歌)を評して情死に及ぶ

まづ祝すべきは市谷の詩人が俗嘲を顧みずして、この新らしき題目を歌ひたることなり。

殘花道人嘗つて桂川を渡る、期は夜なり、風は少しく雨を交ゆ、昨日も今日も五月雨に、ふりくらしたる頃なれど、とあるを見れば梅雨の頃かと思ふ。霧たちこめし水の面に、二ツの光りてらすなり、友におくれし螢火か、はた亡き魂か、あはれくと一面慘絶の光景を畫きて、先づ幽魂の迷執をうつす。それより情死の事由を列ね、更に一轉してその苦痛と應報とを陳ぶ。あやなき闇に棲まじや、閻羅と見ゆる夏木立。之より一回轉して虚實の中に出没し、視るところのもの、心裡を寫出する一節絶筆なり。

こゝは處も桂川、最前の起句を再用して、造化の筆はいまもなほ悲惨の景色うつしいで、我はた冥府の人なりきといふ末句の如き千鈞の重ありと云ふべし。これより、急調に眼を過ぐるもの言ひ、三ツ四ツおちし村雨は、つゝみたる誰が涙かなにて結び、更に、玉鉦の道は小暗し、たどりゆく繩手はほそし、松風の寛の音も身にしみていとうらかなし、と巧麗婉艶の筆を以て行路の詩人の沈痛なる同情を醒起す。これより漸く佳境に進みて影なる人の語るを言ひ、或は平瀉、或は急奔、遂にわれらが罪をゆるせかし、犠牲となりしは愛のためにて全篇を結べり。余は殘花氏の巧妙と幽思この篇にて盡くるを見る。明治の韻文壇、斯かる佳品を出すもの果して幾個かあらむ。

試に余をして簡約に情死に就きて余が見るところを言はしめよ。

人の世に生るや、一の約束を抱きて來れり。人に愛せらるゝ事と、人を愛する事之なり。造化は生物を理するに一の法を設けたり。禽獸鱗介に至るまで、自からこの法に洩るゝ事なし。之ありて萬物活情あり、之ありて世界變化あり、他ならず、心性上に於ける引力之なり。人はこの引

力の持主にして、彼の約束の捺印者なり。

余今村舎に宿して一面の紅雲を見たり。雄鶏は外に出で、食をもとめ、雌鶏は巢に留りて雛を温む。孵りて後僅かに半月、或は母鶏の背に升り、或は羽をくよりて自から隠る。この間言ふ可からざる妙趣ありて余を驚破せり。細かに萬物を見れば情なきものあらず。造化の攝理憐くべきものあり。

或は劣情と呼び、或は聖情と稱ふ。何を以て劣と聖との別をなす、何が故に一は劣にして一は聖なる。若し人間の細小なる眼界を離れて、造化の廣濶なる妙機を窺へば、孰れを聖と呼び、孰れを劣と稱ふを容るさむ。濫りに道法を翻出して、この境を出づれば劣なり、この界に入れば聖なりと言ふは何事ぞ。

情の素たるや一なり。之を運ぶ器と機との異なるに因つて聖劣を分たんとす。世間の道義は之に對して聲を勵まして正邪を論ず。何ぞ迂なるの甚しき。文化は人に被らすに數葉の皮を以てす、之を膚ざれば即ち曰く破徳なりと。寧ろ善野の眞朴にして情を包むに色を以てせざるに如かんや。人の中に二種の相背反せる性あり。一は研磨したるもの、一は善野なるもの。「徳」と云ひ、「善」と云ひ、「潔」と云ひ、「聖」といふ、是等のものは研磨の後に來る。而して別に「情」の如き、「慾」の如き、是等のものは常に裸體ならんことを慕ひて、縦に繋繋を脱せんことを願ふ。この二性は人間の心の野にありて常に相戦ふなり。

電火は人を戮ろすと謂ふ。然り、渠は魔物なり。然れども少しく造化の理を探れ、自からに電火の起らざるべからざるものあるを悟れ。天の氣と地の氣と、相會せざる可からざるものあるを

察せよ。自然界に於て猶此事あり、人間の心界何ぞ常に靜謐なるものならんや。風雨遽かに到り、迅雷忽ち轟ろく光景は心界の奇幻、之を見て直ちに繩墨の則を當て、是非の判別を下さんとするは哲達士の爲すところならんや。

人は常に或度に於て何物かの犠牲たり。能く何物にも犠牲たらざるものは、人間として何の佳趣をも備へざる者なり。何を以て犠牲たる、何が故に犠牲たるを甘んずるを得るや。美いかな人間の情、好むべきかな人間の心、友の爲に身を苦しめ、親の爲めに心を痛め、而して自ら甘心し、眞實何の悔恨なきを得るは豈に讀むべき事にあらずや。「自己」といふ柱に憑りかゝりて、われ安し、われ樂しと喜悅するもの、心は常に枯木なり。花は茲に咲かず、實は茲に熟せず。情は一種の電氣なり、之あるが故に人は能く活動す。時に或は愁雲恨雨の中に異然嗚吼をなし、霹靂一聲人耳を愕ろかすことあるも亦た止むべからず。花なき花は之なり、實なき實は是なり。情死輕んずべからず。

世の中に絶えて心中なかりせば、二世のちぎりもなからまじ……と冥土の飛脚に言はせたる巢林子、われその濃情を愛す。人の誠意は情によりて始めて見るべし。沈靜は元より沈靜の味あり、然れども熱意も亦た熱意の味あるにあらずや。熱意は人を誠實に驅り、誠實は往々にして人を破却に逐ふ。破却素より惡むべし、然れども破却の中に誠實あり、人死して誠實殘る。愛の妙相は之なり。眞玉白玉種類あれど、愛に易ふべきものはなし、と市谷の詩人大に若くなれり。

よしや幻想に欺かるゝ事ありとも、二人が間には一點の詐偽なく、一粒の疑念なし。二にして一、一にして二、斯の如く相抱て水に投ず。死する時樂境にあるが如く、濁水も亦た甘露を味ふ

に似たり。萬事斯くして了れば残るものはしたなき世の浮名のみ。浮名も何ぞや。嗚呼罪なり、然り、罪なり、然れども凡そ世間の罪にして斯の如く純聖なる罪ありや。死は罰なり、然り罰なり、然れども世間の罰にして斯の如く甘養なる罰ありや。嗚呼狂なり、然り狂なり、然れども世間の狂にして斯の如く眞面目なる狂ありや。幻と呼び夢と呼ぶも理あれど、斯の如く眞實なる幻と夢とは人間の容易に味ひ得ざるところ。之を以てわれは情死を憫れむ事切なり。

義理人情に感ずること多きもの、情死の主人となること多きは葉林子の戯曲之を證せり。捉ふるものは義理人情、逃ぐるに怯ならず、避くるに卑しからず、死を以て之を償ふ、滅を以て之を補ふ、情死は勇氣ある卑怯物の處爲なり、是を大膽なる無情漢に比すれば如何ぞや。

そも愛といひ戀といふ、ふかき意を世の人は、さら／＼くまらず氷より、霜より冷えしそのころ、と殘花氏の妙句味ひ多しと言ふべし。請ふ去つて再び桂川的一篇を讀め。葉林子以後圖らずも「情死」は友人を法界の人に得たりけり。

第五篇 國府津在前川村長泉寺にて

(明治二十六年八月より同年十一月まで)

哀詞序

歡樂は長く留り難く、盡くる時を知らず。よろこびは春の華の如く時に順つて散れども、かなしみは永久の鼓吹をなして人の胸をとどろかす。會ふ時のよろこび、別るゝ時のかなしみを償ふべからず。はたまた會ふ時の心け別るゝ時の心の萬分の一にだも長からず。生を享け人間に出てて心を勞して荆棘を過る。或は故なきに敵となり、或は故なきに味方となり、恩怨兩つながら暴雨の前の蛛網に似て、徒らに管だ毛髮の細き縁を結ぶ。夕に笑ひしに因て朝に泣くの果を見つ。朝に泣きしに因つて更に又た夕に笑はんとす。斯の如きは憫れむべし、斯の如きは悲しむべし、斯の如きは厭ふべし。我れつらく世相を觀するに、誰か亦た斯の如くならざらむ。娼婦の涕は紅涙と賞へられ、狼心の偽捨は慈悲と稱へらる。友と呼び愛人といふも、はしたなきもつれに脆くも水と冷ゆるは世の習ひなり。鷲を白しと云ひ、鴉を黒しといふも唯だ目にみゆるところを言ふのみ。人の心を尋ねればよしなきことを争ひては、瞋恚の焰を懷にもやし、露ほどの恨みも長しへに解くることなく、人を毀はんと思ふ。右に行くもの、袂は左に往くもの、手に把られ、

左に行くものも亦た右に行くものに支へらる。鶴の面をもてる者に蛇の心あり、美はしき果實に怖ろしき毒を含めることあり。洞に近ければ蛇蝎蟻し、林に入れば猛獸遊ふ。二世といふ縁に二世あるは少なく、三世といふに三世あるも亦妙なし。まことの心にて契る誓は稀れにして、唯だ目前の情と慾とに動くも亦たはかなき至りなり。誓と恩とに於て亦斯の如し。必らず酬ふべしと思ふ程ならば酬はずして自から酬ゆるものを。必らず忘れじといふ恩ならば忘るゝとも自から忘るまじきを。誓には手をもて酬ひんと思ふこと多く、恩には口をもて報ずること多し。敵と味方に於いて亦た斯の如し。一時の利の爲めに味方となるものは、又一時の害の爲めに離るゝを易しとす。一時の害の爲めに敵となるもの、又た一時の利の爲めに味方となるを易しとす。西風には東に飛び、東風には西に揚がるは紙鳶なり。人の心も大方は斯くの如し。風の西に吹くを能く見るものを達識者と呼び、風の東に轉ずるを看破するものあれば卓見家と稱なへんとす。勇者はその風に御して高く飛び、智者はその風を袋に蓄はへて後の用を爲す。運よくして思ふこと圖に當りなば、傲然として人を凌ぎ、運あしくして窮窮りなば憂悶して天を恨む。凌がるゝ人は凌ぐ人よりも眞に愚かなりや、恨まるゝ天は恨む人の心を測り得べきや。斯の如きは世なり。斯の如きは人間なり。深く心を人世に置くもの、安くんぞ憂なきを得ん、安くんぞ悲なきを得ん。甘露を雨らす法の道も世を踏はずこと遅く、仁義の教も人の心をいかにせむ。天地の間に我が心を寄するものを求めて得ざれば我が心は涸れなむ。

我はあからさまに我が心を曰ふ、物に感ずること深くして悲に沈むこと常ならざるを。我は明かに我が情を曰ふ、美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。然はあれども、わが美く

しと思ふは人の美くしと思ふものにあらず、わが物に感ずるは世間の衆生が感ずる如きにあらず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むことを知らず。形を鑿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。人われを呼びて萬有的趣味の賊となせど、われは既に萬有造化の美に感ずるの時を失へり。多くの繪畫は我を欺けり。名匠の手に成るものと雖多く我を感せしむる能はず。繪畫既に然り、この不思議なる造化も然り、造化も唯だ自然に成りたる繪畫のみ。われは世の俗韻俗調の詩人が徒らに天地の美を玩弄するを惡むこと甚だし。然れども自ら顧みる時は、何が故に我のみ天地の美に動かさるゝことの少なきかを怪しまずんばあらず。動かさるゝこと少なきにあらず、多く動かされて多く自ら欺きたればなり。我は再び言ふ、われは美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。花のあしたを山に迷ひ、月のゆふべを野にくらすなど、人には狂へりと言はるゝも自から悟ることを知らず、人には愚なりと言はるゝとも自から賢からんことを冀はず。或時は蝶の夢の覺め易きを恨み、またある時は蟲の音の夜を長うするを悲しむ。この恨みこの悲しみを何が故の恨み、何が故の悲しみぞと問ふも、蝶の夢は夢なればこそ覺め、蟲の音は秋なればこそ悲しきなれと答ふるの外に答なきに同じ。嗚呼天地味ひなきこと久し。花にあこがるゝもの誰ぞ、月に嘯くもの誰ぞ、人世の冉冉として滅毀するを嗟し、恨として命運の私しがたきを慨す。身は學舎にあり、中宵枕を排して、燈を剪りて亡友の爲に哀詞を綴る。筆動くこと極めて遅く、涕零つること甚だ多し。相距ること二十餘日、天と地の間に於てこの距離は幾何ぞ。

ほたる

ゆふべの暉をさまりて、
 まづ暮れかゝる草陰に、
 わづかに影を點せども、
 なほ身を恥づるけしきあり。
 羽巖を逐うて細川の、
 淺瀬をはしる若鮎が、
 靜まる頃やはたる火は、
 低く水邊をわたり行く。
 腐草に生をうくる身の、
 かなしや月に照らされて、
 もとの草にもかへらずに、
 たちまち空に消えにけり。

蝶のゆくへ

舞うてゆくへを問ひたまふ、
 心のほどぞうれしけれ、
 秋の野面をそこはかと、
 尋ねて迷ふ蝶が身を。
 行くもかへるも同じ關、
 越え來し方に越えて行く。
 花の野山に舞ひし身は、
 花なき野邊も元の宿。
 前もなければ後もまた、
 「運命」の外には「我」もなし。
 ひらく／＼と舞ひ行くは、
 夢とまことの中間なり。

雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙つまたの蝶、
 羽を收めてやすらへり。
 露の重荷うたがに下垂るゝ、
 草は思ひに沈むめり。
 秋の無情に身を責むる。
 花は愁ひに色褪めぬ。
 言はず語らぬ蝶ふたつ
 齊しく起ちて舞ひ行けり。
 うしろを見れば野は寂し。
 前に向へば風冷し。
 過ぎにし春は夢なれど、
 迷ひ行衛は何處ぞや。

同じ恨みの蝶ふたつ。
 重げに見ゆる四の翼。
 雙ひ飛びてもひえわたる、
 秋のつるぎの怖ろしや。
 雄おも雌めも共にたゆたひて、
 もと來し方へ消れ行く。

もとの一枝ひとこゝをまたの宿、
 暫しと憩ふ蝶ふたつ。
 夕告げわたる鐘の音に、
 おどろきて立つ蝶ふたつ。
 こたびは別れて西ひがし、
 振りかへりつゝ去りにけり。

眠れる蝶

けさ立ちそめし秋風に、

「自然」のいろはかはりけり。
高梢に蟬の聲細く、
茂草に蟲の歌悲し。

林には、

鶉のこゑさへうらがれて、

野面には、

千草の花もうれひけり。

あはれ、あはれ、蝶一羽、

破れし花に眠れるよ。

早やも来ぬ、早やも来ぬ秋、

萬物秋となりにつれ。

蟻はおどろきて穴索め、

蛇はうなづきて洞に入る。

田つくりは、

あしたの星に稻を刈り、

山樵は、

月に嘯むきて冬に備ふ。

蝶よ、いましのみ、蝶よ、

破れし花に眠るはいかに。

破れし花も宿假れば、

運命のそなへし床なるを。

春のはじめに迷ひ出で、

秋の今日まで酔ひ酔ひて、

あしたには、

千よろづの花の露に厭き、

ゆふべには、

夢なき夢の敷を經ぬ。

只だ此まゝに「寂」として、

花もろともに滅えばやな。

萬物の聲と詩人

萬物白から聲あり。萬物白から聲あれば白から又た榮調あり。蚯蚓は動物の中に於て、醜にし

て且つ拙なるものなり。然れども夜深深窓に當りて斷續の音を聆く時は、人をして造化の生物を
 理する妙機の驚くべきものを悟らしむ。自然は不調和の中に調和を置けり、悲哀の中に欣悦
 を置けり、欣悦の裡に悲哀を置けり。運命は人を脅かすなり、而して人を驅つて怯懦卑劣なる行
 爲をなさしむるなり。情慾は人を誘ふなり、而して人を率ゐて我儘氣隨のものとなすなり。自然
 は廣漠たる大海にして、人生は延々たる浮島に似たり。風浪常時に四圍を襲ひ來りて、寧靜なる
 事は甚だ稀なり。四節は追はずして駿馬の如くに奔馳し、草木の榮枯は輪なくして廻轉する車の
 如く、自然は常變なり、須臾も停滯することあるなし。自然は常道なり、須臾も寧靜することな
 し。自然は常爲なり、須臾も無爲あることなし。その變、その動、その爲、各自一個の定法の上
 に立てり、而して又た根本の法ありて之を支配するを見る。淵に臨みて靜かに水流の動靜を察す
 るに、行きたるものは必らず反へる、反へれるものは必らず行く。若きもの必らず老ゆ、生ある
 もの必らず死す。苦あるものに樂あり、樂あるものに苦あり。造化は偏頗にして偏頗にあらず、
 私にして無私なり。差別の底に無差別あり。不平等の懷に平等あり。然り、造化の妙機は秘して
 其最奥にあるなり。人間の最奥なるところ之を人間の空と言ひ、造化の最奥なるところ之を造化
 の靈と言ふ。造化の最奥！造化の靈！そこに大平等の理あるなり。そこに天地至妙の調和あ
 るなり。人間はいかほどに卑しく拙なくありとも、天地至妙の調和は之によりて毀損せらるゝこ
 となきなり。あはれこの至妙の調和より、萬物皆な或一種の聲を放ちつゝあるにあらずや。
 形の醜美を見て直ちに其醜美を決するは未だ美を判ずるの最後にあらず。外極めて醜なるもの
 にして、内極めて美なるものあり。外極めて美にして、内極めて醜なるものあり。醜と美とを判

つは必らずしも其形象に關はるにあらざるなり。形體にあらはれたる醜美を斷ずるは獨り眼瞼の
 み。眼瞼は未だ以て醜美を斷ずる唯一の判官となすべきにあらず。鼓膜亦た關つて力あるべきも
 のなり。否、否、眼瞼も鼓膜も未だ以て眞に醜美を判すべきものにあらざるなり。凡そ形の美は
 心の美より出づ。形は心の現象のみ。形を知るものは形なり、心を視るものは又た心ならざるべ
 からず。造化は奇しき力を以て、萬物に自からなる聲を發せしむ。之を以て聊かその心を形狀の
 外にあらはさしむ、之を以てその情を語らしめ、之を以てその意を言はしむ。無絃の大琴懸けて
 宇宙の中央にあり。萬物の情、萬物の心、悉くこの大琴に觸れざるはなく、悉くこの大琴の音と
 ならざるはなし。情及び心、一々其軌を異にするが如しと雖、要するに琴の音色の異なるが如く
 に異なるのみにして、宇宙の中心に懸れる大琴の音たるに於ては均しきなり。個々特々の悲苦及
 び悅樂、要するにこの大琴の一部分のみ。悲しき時は獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、
 凡てのものゝ悲しむなり。喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども、然るにあらず、凡てのものゝ喜ぶ
 なり。「自然」は萬物に「私情」あるを許さず。私情をして、大法の外に縱なる運行をなさしむ
 ることあるなし。私情の喜は故なきの喜なり、私情の悲は故なきの悲なり。彼の大琴に相渉ると
 ころなければ、根なき萍の海に漂ふが如きのみ。情及び心、個々特立して而して個々の中心を
 以て、宇宙の大琴の中心に聯なれり。海も陸も、山も水も、ひとしく我が心の一部分にして、我
 れも亦た渠の一部分なり。渠も我も何物かの一部分にして歸するところ即ち一なり。四節の更迭
 は、老少盛衰の理と果して幾程の差違かあらむ。樹葉の凋落は老衰の末後と如何の異別かあらむ。
 花笑ふ時に我も笑ひ、花落つる時に我も落つ。實熟する時に我も熟し、實墜する時に我も墜つ。

渠を支配する引力の法は即ち我を支配する引力の法なり。渠を支配する生命の法は即ち我を支配する生命の法なり。渠と我との間に「自然」の前に立ちて甚だしき相違あることなし。法は一なり。法に順ふものも亦た一なり。法と法に順ふものとの関係も亦た一なり。情及び心、漠として捕捉すべきやうなき如き情及び心、渠も亦た法の中であり、渠も亦た法の下にあり。法の重きこと斯の如し。斯に於て凡ての聲、情及び心の響なる凡ての聲の一致を見る。高きも低きも、濁れるも清めるも、然り此の一致あり。この一致を觀て後に多くの不一致を觀ず、之れ詩人なり。この大平等大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、之れ詩人なり。天地を取つて一の美術となすは之を以てなり。あらゆる聲を取つて音樂となすは之を以てなり。詩人の前には凡ての物、凡ての事、悉く之れ詩なるは之を以てなり。多くの不一致の中の不一致を取り、多くの不平等の中の一不平等を取り、多くの差別の中の一差別を取り、而して之に懸着するを知つて、彼の大一致、大平等、大差別に悟入すること能はざるものは未だ以て天地の大なる詩たるを知らざるものなり。難いかな詩人の業や。

道德を論ずるの書は多し。宗教の名と其の教法を設くるものは多し。然れども道德は未だ人間をして縦に製作せしむる程に低くならざるなり。宗教も亦た人間をして隨意に料理せしむる程に卑しくならざるなり。道德の底に一の道德あり、宗教の底に一の宗教あるは、美術の底に一の美術あると相異なる所なからんか。要するにモーターリチーは一なるのみ。政治的に所謂道德なりとするところの者、例せば儒教の如きもの未だ以てモーターリチーの本然とは言ふべからず。宗派的に所謂道德なりとするところのもの未だ以てモーターリチーの本然と言ふべからず。宗教の中の宗

教とすべきは、その人性人情に感應する所多きにあり。モーターリチーも亦た然らんか。美術も亦た然らんか。必竟するに宗教も美術も人心の上に臨める大感化力なるに於ては相異なるところあるなし。然れどもラスキンの言へる如く、美術は道義を圓滿にするの力を有すれども宗教の如く道義を創作することは能はず。宗教の天啓たるが如く、美術も亦た一種の天啓なり。宗教の高尚なる使命を帯びたる如くに美術も亦た高尚なる使命を帯べり。ヒューマニチーは其の唯一の目的なり。無より有を出すにあらず。有を取りて之を完うするものなり。尤も劣等なる動物より尤も高等なる動物を作るにあらず。尤も高等なる動物をして、その高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり。宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷くるあれば必ずその責罰としての不調和あり。之れ即ち調和の中に戦へる不調和の原意ある所以なり。微妙なる階級微妙なる秩序、これありて萬物悉く其の處を安んずるを得るなり。東に吹く風は再び西に吹き來る、氣燥くところに雲自から簇まるなり、雲は雨となり、雨は雲となる、是等のもの一として宇宙の大調和の爲に動くところの小不調和にあらざるはなし。萬物の事皆な空にして法のみ獨り實なり、法のみ獨り實にして法に遵ふところの萬物皆な實なるを得べし。自然は常變にして不變、常動にして不動、常爲にして無爲、法の眼に於て然り。

宗教完全にして美術も亦た完全ならんか美術と宗教と相距ること數歩を出でざるなり。然れども宗教にしていつまでも乾燥なる神學的の論據に立籠らんか、美術も亦た己がじまゝなる方向に傾かんとするは當然の勢なり。宗教の度と美術の度とは殆ど一種の比例をなせり。一國民の美術は到底その倫理の表裏なり。野卑なる國民は卑野なる美術に甘んじ、高尚なる國民は高尚なる美

術を求む。勇敢なる國民に勇武の物語出で、淫逸なる國民に淫逸なる史乘あり。必竟するに萬物その自からなる聲をなして、而して美術はその聲を具體にしたるものに過ぎざれば、形は如何にありとも、その聲の主なる心にして卑野なれば美術も卑野ならざらんと欲して得べからざるは至當の理なり。宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍に來りて、己が代表する國民の爲に、己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。ヒューマニチーの各種の變狀は之によりて發露せらる。眞實にして虚飾なき人生の説明者はこの琴絃の下にありて、明地にその至情を吐く。その聲の悲しき、その聲の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。詩人は己れの爲に生くるにあらず、己が圍まれたるミステリーの爲めに生れたるなり。その聲は己れの聲にあらず、己れを圍める小天地の聲なり。渠は誘惑にも人に先んじ、迷路にも人に後るゝなし、渠は無言にして常に語り、無爲にして常に爲せり。渠を圍める小天地は悲をも悦をも、彼を通じて發露せざることなし。渠は神聖なる蓄音器なり、萬物自然の聲、渠に蓄へられて而して渠が爲に世に啓示せらる。秋の蟲はその悲を詩人に傳へ、空の鳥は其自由を詩人に告ぐ。牢獄も詩人は之を辭せず、碧空も詩人は之を遠しとせず、天地は一の美術なり、詩人なくんば誰れか能く斯の妙機を聞て之を人間に語らんか。

情熱

ミルトンは情熱を以て大詩人の一要素としたり。深幽と清楚とを備へたるは少なからず、然れどもまことの情熱を具有するは大詩人にあらずんば期すべからず。サタイアをもユーモアをも適宜に備ふるものは多くあれど、情熱を缺くが故に眞正の詩人たらざるもの擧て數ふべからず。情熱なきサタイアリストの筆は諷刺の半面を完備すれども人間の實相を刻むこと難し。ボルチーアとスウキフトの偉大なるは、その諷刺の偉大なるに非ずして、其情熱の熾烈なるものあればなり。ユーモリストに到りては自ら其趣を異にすれども、之とても亦た隱約の間に情熱を有するにあらざれば戲言戯語の價直を越ゆること能はざるべし。

然はあれども尤も多く情熱の必要を認むるはトラゼヂーに於てあるべし。シュレーゲルも悲曲の要素は熱意なりと論じられぬ。熱意、情熱、必竟するに其素たるや一なり。情熱を缺きたる聖淨は、自から講壇より起る乾燥の聲の如く、美術のエボルーションには適ひ難し。情熱を缺きたる純潔は自から無邪氣なる記載に止りて將た又た詩的の變化を現し難し。情熱を缺きたる深幽は自からアンニヒレーチーブにして、物に觸れて響なく、深淵泓澄たる妙趣はあれども、巨瀑空に懸つて岩石震動するの詩趣あらず。凡そ美術の壯快を極むるもの、莊嚴を極むるもの、優美を極むるもの、必らず其の根柢に於て情熱を具有せざるべからず。内に鬱勃するところのものありて、而して外に異彩ある光線を放つべし。情熱はすべてこのものに奇異なる洗禮を施すものなり。特殊の進化を與ふるものなり。「神聖」といふ語、純潔」といふ語などに、無量の味ある所以のもの必竟或度までは比較的のものにして情熱と纏繋するに始まりて情熱の最後の洗禮によりて終に殆んど絶對的の奇觀を呈す。

詩人は人類を無差別に批判するものなり。「神聖」も「純潔」も、或一定の尺度を以て測量すべきものにあらず。何處までも活きたる人間として觀察すべきものなり。「時」と「場所」とに限り、或る宗教の形に拘はり、或る道義の式に泥みて人生を批判するは詩人の忌むべき事なり。人生の活相を觀するには極めて平靜なる活眼を以てせざるべからず。寫實は到底是認せざるべからず、唯だ寫實たるや、自から其の注目するところに異同あり、或は特更に人間の醜惡なる部分のみを描畫するに止まるもあり、或は殊更に調子の狂ひたる心の解剖に従事するに意を籠むるもあり。是等は寫實に偏したる弊の漸重したるものにして、人生を利することも覺束なく、宇宙の進歩に益するところもあるなし。吾人は寫實を厭ふものにあらず、然れども卑野なる目的に因つて立てる寫實は好美のものと云ふべからず。寫實も到底情熱を根柢に置かざれば、寫實の爲に寫實をなすの弊を免れ難し。若し夫れ寫實と理想と兼ね備へたるものに至りては情熱なくして如何に其の妙趣に達するを得べけんや。

情熱は虚思の反對なり、情熱は執なり、故にあらず。凡そ情熱のあるところには必らず執るところあり。故に大なる詩人には必らず一種の信仰あり、必らず一種の宗教あり、必らず一種の神學あり。ホーマーに於て希臘古神の精を見る、シエーキスピアに於て英國中古の信仰を見る、西行に於て西行の宗教あり、芭蕉に於て芭蕉の宗教あり、唯だ俗眼を以て之を視ること能はざるは凡ての儀式と凡ての形式とを離れて立てる宗教なればなり。彼等の宗教的觀念は具體的なるを得ざるも、之を以て宗教なしと言ふは宗教の何物たるを知らざる論者の見なり。人類に對する濃厚なる同情は以て宗教の一部分と名づく可からざるか。人類の爲に沈痛なる批判を下して反省を

促がすは、以て宗教の一部分と名く可からざるか。トラゼヂも以て宗教たるを得べく、コメデも以て宗教たるを得べし。然れども誤解すること勿れ、吾人は彼の無暗に宗教と文學を混同して、その具體的形式に嵌めんとまでに意氣込みたる主義に左袒するものにあらず。

宗教(余が謂ふ所の)は情熱を興すに就いて疑ひなく一大要素ならずんばあらず。是非と善惡とを辨別するに最大の力を持てる宗教なかりせば、寧ろブルータルなる情熱を得ることあるとも優と聖と美とを備へたる情熱は之を期すべからず。宗教的本能は人心の最奥を貫きて純乎たる高等進化をすべての觀念に施すものなり。あはれむべき利己の精神によつて儉生する人間を覺醒して、物類相愛の妙理を觀せしめ、人類相互の關係を悟らしむるもの、宗教の力にあらずして何ぞや。茲に宗教あり、而して後に高尚なる情熱あり、宗教的本能を離れざる情熱が美術の上に異妙のエポルーションを與ふるの力豈輕んずべけんや。

いかに深遠なる哲理を含めりとも、情熱なきの詩は活きたる美術を成し難し。いかに技の上は精巧を極むるものと雖、若し情熱を缺けるものあれば丹青の妙趣を盡せるものと云ふべからず。美術に餘情あるは、その作者に裡面の活氣あればなり。餘情は徒爾に得らるべきものならず、作者の情熱が自からに澁積するところに於て餘情の源泉を存す、單純なる模倣者が人を動かすこと能はざるは之を以てなり。大なる創作は大なる情熱に伴ふものなり。創作と模倣、必竟するに情熱の有無を以て判ずべし。然り丹青家が無意味なる造化の模倣を以て事とし、只管に虚論をのみ心とするは抑も情熱を解せざるの過ちなり。

願みて明治の作家を屈ふるに、眞に情熱の趣を具ふるもの果して之を求め得べきや。露伴に於

て多少は之を見る、然れども彼の情熱は彼の信仰（宗教？）によりて幾分か常に冷却せられつゝあるなり。彼は情熱を餘りある程に持ちながら、一種の寂滅的思想を以て之を滅殺しつゝあるなり。彼がトラゼデーの大作を成さざるは他にも原因あるべけれど、主として此理あればなるべし。紅葉の情熱は宗教と共に歩まず、常に實際と相追隨するものなり。故に彼は世相に對する濃厚なる同情を有すると雖、其の著作の何とやら技の妙に偏して、想の靈に及ばざるは寧ろ情熱の眞ならざるに因するにあらずとせんや。美妙に於ては殆ど情熱と名くべきものあるを認めず。敘事家としては知らず、寫實家としての彼の技倆は紅葉に及ぶべからず。湖處子を崇拜する人々にして芥りに彼の純潔を言ふ者あるは好し、然れども余は彼の純潔が情熱の洗禮を受けたるものにあらずるを信するが故に、美しき純潔なりと言ふを許さず。嵯峨のやにもしるき情熱あるは實なり、然れども彼の情熱は寧ろ田舎法師の情熱にして大詩人の情熱を離るゝこと遠しと言ふべし。頃日古藤庵の悲曲續出するや、讀者孰れも何となく奇異の觀をなすと覺ゆ。要するに古藤庵の情熱自から從來の作者に異るところあればなるべし、悲曲としての價値は兎も角も吾人は其の情熱を以て多く得難きものと認めざるを得ず。齋藤綠雨にもしるき情熱あるは、彼の小説を一見しても看破し得るところなれど、憾むらくはその情熱の素たる自から卑野なるを免かれず、彼の如く諷刺の舌を有する作者にして、彼の如く野卑の情熱をもてるは惜しむべき至りなり。彼をして一年間も露伴の警齋に籠もらしめばやと外目には心配せらるゝなり。今日の作家が病はその情熱の缺乏に基つくと多く、人間觀に嚴肅と眞摯とを今日の作家に見る能はざるもの職として之に因せずんばならず。好愛すべきシンプリシチーと愛憐すべきデリケーシーとを見る能はざるも職と

して之に因せずんばならず。若し日本の固有の宗教を解剖して情熱と相關するところを發見するを得ば文學史上に愉快なる研究なるべけれども、之れ余が今日の業にあらず、聊か記して識者に問ふのみ。

二 夕 觀

其 一

ある宵われ臆にあたりて横はる。ところは海の郷、秋高く天朗らかにして、よろづの象、よろづの物凜乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が偏促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく能なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に徹透す、而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛糾して、我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。不死不朽彼と與にあり、衰老病死我と與にあり。鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く折れ易き我れ如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲愴に撃たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲愴我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊にあるが如し、我が爲すなきと我が言ふなきと、我

が行くなきとを責む。われ起つて茅舎を出で、且つ仰ぎ且つ俯して、罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に到れば、忽ち聴く蟲聲の如く耳朶を穿つを。之を聴いて我心は一轉せり、再び之を聴いて悶心更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。看よ唧々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらむ。彼を悲しむと看取せんか、我も亦た悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか、我も亦た吟哦してあるなり。心境一轉すれば彼も無く、我も無し、遶焉たる大空の百千の提燈を掲げ出せるのみ。

其二

われは歩して水際に下れり。浪白く萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱ぬきて蒼穹を察すれば、我れ「我」を遺れて飄然として襤褸の如き「時」を脱するに似たり。茫々乎たる空際には歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレトリーありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭らせり、同じく我れを光らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として残れり。人間は之を幽奥として畏るゝと雖、大なる現實は始めより終りまで現實として残れり。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、之を以て調和す可からざる原素の如く諍へる間に天地の幽奥は依然として大なる現實として残れり。

其三

われは自から答へて安らかなる心を以て落窓に反れり。わが視たる群星は未だ念頭を去らず。静かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心はなほ彼にあり。我が讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は思想の廣き歴史の紙に似たり。彼處にホーマーあり、シエーキスピアあり、詩星の天系を亂して行くはバイロン、ポルテアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは泛々たる文壇の小星、吁、悠々たる天地、限りなく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に對して暫らく茫然たり。

7830

昭和二十二年七月十五日
昭和二十二年九月廿五日
昭和二十二年九月廿五日

第一刷發行
第十五刷發行

北村透谷集
定價參拾圓



編者 島崎藤村

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京區新宿區市谷加賀町一丁目二番地 小坂孟

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三 岩波書店
配給元 東京都千代田區神田淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社
會員番號A一〇九〇四號

大日本印刷・永井製本

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。吾等は民を意味ならしめるために藝藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と詩とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに従ふて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に懸なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産機械出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと考へる全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚嚇して數十冊を強ふるが如き、果して其得言する意義解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推挙するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の賣渡の意重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は腕をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を採したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外観を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益々輝かせしめようとする。この計畫大なるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は精力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのるはしき共同を期す。

昭和二年七月



914.6
K16P

終

